

【論 文】

機能分化社会における性愛の消滅？

片 瀬 一 男

はじめに

『コンビニ人間』（文藝春秋社）で第 155 回芥川賞（2016 年）を受賞した作家・村田紗耶香に、『消滅世界』（河出書房新社）という逆ユートピア小説がある。この作品世界で「消滅」したのは「性交」である。人工授精が飛躍的に発達した近未来の日本では、皆、人工授精で子どもを産むようになる。生殖と快楽が分離した世界では、性交は過去の人類が行った野蛮な〈交尾〉とされ、夫婦間のセックスは〈近親相姦〉と呼ばれる。また恋愛や快楽の対象も、生身の人間ではなく、アニメのキャラやフィギュアになり、カプセルに入れて持ち運ばれる。

そんな世界で父と母の〈交尾〉で生まれてしまった主人公は、そのことを悩み続け、母親との諍いも絶えない。彼女はやがて夫と結婚し、性のない清潔で無菌な家族をつくろうとし、実験都市・楽園に移住する。そこでは、全市民がひとつの家族として共同生活をおくり、交代で子どもを作っていく（男性も人工子宮によって妊娠ができる）。子どもはみんなの共有財産として全員が「子供ちゃん」と呼ばれ、すべての大人が親となるという「消滅世界」であった……。

今日、生殖技術は発展し、生身の人間よりも「キャラ」に萌える若者も少なくない。1974 年以来、40 年間にわたって行われてきた「青少年の性行動全国調査」からみても 21 世紀に入って青少年の性行動の不活発化が明らかになってきた（片瀬 2018）。しかもこの不活発化は斉一に進行したのではなく、活発な層と不活発な層への分極化をとまなうものであり（高橋 2007, 林 2018）、もはや「草食化」（森岡 2008）といった単純な言説では把握できない複雑な様相を呈している。愛も性もその多様性に照準しなければ語るができなくなった。

本稿では、この錯綜した現代青年の性愛の様相を解きほぐすために、N. ルーマンの『情熱としての愛』におけるコミュニケーション論的な恋愛論をもとに「第 8 回青少年の性行動全国調査」（2017 年）のデータを分析する。それによって後期近代における「愛」が、独自の精神世界をもった個人同士におけるコミュニケーションの不確実性または予測不可能性というアポリアに直面せざるを得なくなった経緯の一端を究明したい。

1. 「青少年の草食化」というメディア・フレーム

1.1. 20 世紀における「感情革命」：ロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへ

A. ギデンズ (Giddens 1992=1995) によると、20 世紀が「感情革命」の世紀であり、「ロマンティック・ラブ」から「コンフルエント・ラブ」へという愛の形態の変容にともなって、とりわけ女性に性の解放たとえば婚前性交を可能にした。このうち「ロマンティック・ラブ」は、近代初期に成立し、恋愛や結婚を家規範——家の継承や労働力の調達、親族関係の形成などから解放したという点で、男女間の愛情のみにもとづく「純粋な関係性」を準備した。しかし、これは強いモノガミー規範を伴うとともに、同時期に起こった産業革命によって職住分離が進むと、男性が外の職場に働きに出て行き、女性を家族に押し込める働きをした。

これに対して、現代の若い世代では、性別役割意識が解体しているので、「ロマンティック・ラブ」は忌避され、「純粋な関係性」のみにもとづく「コンフルエント・ラブ」が選好されるようになった。ロマンティック・ラブが、「特定の人」との永続的な関係を願うのに対して、コンフルエント・ラブは「特別の関係」が純粋に優先されるので、こうした関係に相応しい相手をその都度、探すことになる。このコンフルエント・ラブのもとで、不平等な男女関係の変革がすすめられ、避妊技術の普及など性的にも男女平等を可能にする社会的・技術的前提が整備されたため、セクシュアリティと生殖が明確に分離された。その結果、生殖をともなわず快樂のみを目的とした「自由に塑形できるセクシュアリティ」(Giddens 1992=1995) が成立した。これが、20 世紀後半の「親密性の変容」である。こうして、自由な主体としての男女が自らの意思で選択するセクシュアリティが成立した結果、女性のみにも純潔を求める「性の二重規準」が解体され、少なからぬ女性が婚前性交を経験するようになった、とされる。

1.2. 21 世紀における青少年の「草食化」

ところが、このギデンズの予想に反して、21 世紀を迎えて、若年層の性行動の不活発化が顕在化し始めた(国立社会保障・人口問題研究 2017, 片瀬 2018)。2017 年に実施された第 8 回「青少年の性行動全国調査」もふまえて高校生の性行動(キス・性交)経験率をみても(図 1)、2005 年から 17 年にかけて、下降傾向にある。

こうして 2000 年代に入ってから青少年の性行動の不活発化が生じたことに関して、恋愛や性行動を消極的な若年男性を指して「草食男子」(深澤 2007) または「草食系男子」(森岡 2008) といった表現が使われるようになった。この造語は、少なくとも提唱者の 1 人で

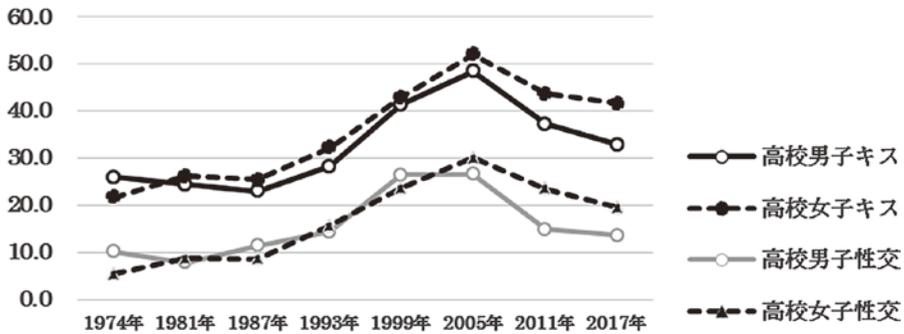


図1. 高校生の性行動経験率の推移

ある森岡（2008）よれば、従来の男性性すなわち「男らしさ」の呪縛に拘束されず、対等な女性観をもつために、女性との関係を性的欲望で壊すことを嫌う男性を意味していたという。そこで男子高校生における性別役割意識と性行動の関係を見るために、第7回と第8回の「青少年の性行動全国調査」の予備調査として、2010年と15年に同一の高校で全数調査として行われたデータを分析したところ、「男性が女性をリードすべきだ」という意見への賛否は、この5年間で男女ともほとんど変わっていない。また、平等化志向の男子ほど性行動をしないという森岡（2008）の見解を検討するために、より男性性を示すと思われる「男性が女性をリードすべきだ」という項目に賛成者を「男性性志向」、反対する者を「平等化志向」という性別役割類型とし、デート、キス、性交の3つの性行動の経験率について2015年の男子高校生で比較した（図2）。

この図からわかるように、男性性志向の者に比べると、平等化志向の者は、性行動が不活発であることが分かる。しかし、両者の差はデート→キス→性交と恋愛シーケンスが進行するにつれ、その差は小さくなる。実際、統計的検定をすると、デート経験とキス経験は5%水準でみて性別役割類型と有意に関連するが、性交経験では統計的にみて有意な関連はない。したがって、男子の平等化志向が強まったために性行動が不活発化したという「草食化言説」は、恋愛シーケンスの初期には当てはまるが、後期には当てはまらないという限

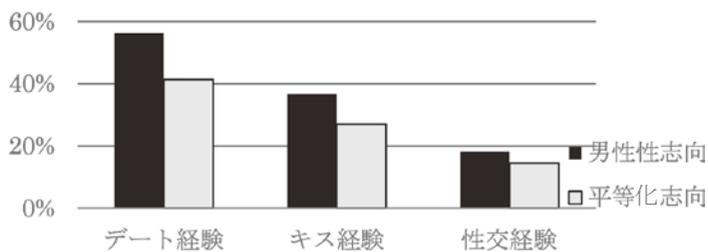


図2. 男性性志向-平等化志向別にみた性行動 (男子)

定性をもっている。また先にみたように、そもそも平等化志向の者が増えているわけでもない、この点でも平等化意識の高まりが性行動の不活発化を生んだとはいいがたい。

1.3. 青少年の性行動の分極化：草食化言説の誤謬

この森岡らの「草食化」言説は、また「青少年の性行動全国調査」の時系列分析からもその根拠が疑われている。たしかに、先の図1に示したように、「草食系男子」とよばれるように、性行動に積極的でない男子が増えていることは事実である。高橋（2010）によると、大学生の男子では1993年以降、高校生男子では1999年以降、性交経験率が横ばい状態になっているだけでなく、2005年の時点では恋人もなく性交経験もない性行動の「不活発層」が、高校生男子では約3分の2、大学生男子では約3分の1存在するという。また1999年から2005年にかけて、女子を中心にデート経験やキス経験といった親密性の表出に関連した行動の経験率は増えているのに対して、とくに男子において性的関心や自慰・射精経験といった性的な欲求充足に関連した行動の経験率が低下しているという。しかし、2005年調査の分析結果（高橋，2007）からみる限り、斉一的な性行動の不活発化が生じているのではなく、「性行動の分極化」とも呼ぶべき現象が生じている。実際、性的関心と性交経験の組み合わせから、高橋（2007）は、1990年代以降は性的関心も性交経験もある高校生と、性的関心も性交経験のない高校生への分極化が進行することによって、中間的な層が減少してきたことを指摘する¹。さらに、高橋（2010）は、性行動の不活発な男子と性的関心の弱い男子、男らしさにこだわらない男子は、ある程度オーバーラップするが、携帯電話の普及などにより男女の性別分離の解消が進んできたため、女子との距離が近い男子とは重ならないと推測する。この点では、高橋（2010）によると、「草食系男子」という言説は、部分的には真であるが、全体としては必ずしも当てはまらない「合成の誤謬」によって構築されたものであるという。すなわち、「女子との距離が近いのに性愛に淡泊という合成パターンは、前者の部分で同世代比較を用いながら、後者の部分では年長世代や過去の記憶と比較することで、リアリティを獲得している」（高橋，2010：7）という誤謬に陥っていると結論づけている。

こうしてみると、青少年の性行動の不活発化に端を発する「草食系男子」という言説は、必ずしも現代の青少年の性行動の実態に関しては正鵠を射ているものとは言えない。現在、青少年に起こっているのは性行動の分極化とも呼ぶべき事態であり、またここには示さなかったが大学生の性行動の不活発化は、男子より女子で著しい。性交経験率で見れば、男子ではピーク時の2005年53%から2017年の47%と6ポイントの減だが、女子ではピーク時

¹ 同じ傾向は、2011年調査においても、とりわけ女子について顕著になっている（林2013）。

の2005年の62%から36%と26ポイントと大幅に減少し、2000年代初頭に縮小した性交経験率の性差が再び拡大しつつある。また性行動の累積経験率を生年世代別に比較した林(2018)も、性行動の不活発化と分極化が女子大学生においてとりわけ進行していることを指摘している。つまり「草食化」が起こったのは、男子よりむしろおいてである。にもかかわらず「草食系男子」とい言説は、性行動を超えて消費や労働(本田ほか, 2006)にまで拡大され、例えば1990年代から続いた長期不況で非正規雇用に就労せざるをえなかった若者の自己責任を心理主義的に批判する新自由主義的イデオロギーにさおさすものでもあった。

メディアが伝える若者像と現実の若者の実像の間に少なからぬ乖離がみられるのは、言わばメディアが、都合のよい「メディア・フレーム」によって若者の多様な現象の一部を切り取り、単純化してその時代の若者像を「構築」していることによる。ここでいう「メディア・フレーム」とは、メディアが報道する事実の選択をする際の枠組みであるが、アメリカでは1960年代の若者の異議申し立てがメディアのフレームによって恣意的に歪められて伝えられたことが、当時の運動当事者による長年にわたる研究によって明らかにされている(Gitlin 1987 = 1993)。日本でも、とりわけ1970年代以降は、若者に社会の関心が集まり、「モラトリアム人間」(小此木 1978)論をはじめとする心理主義的な若者言説が氾濫し始めた時代でもあった(片瀬 2015)²。

2. まじめになった青少年？

2.1 学校適応感と性行動

こうして高校生の性行動の不活発化の背景要因を読み解くためには、まず彼らを取り巻く社会環境に目を向けていく必要がある。尾嶋(2018)はこれまで高校生の性行動を活発化させてきた「生活構造の多チャンネル化」(轟 2001)が、スマートフォンなどの普及に伴ってさらに加速されているにもかかわらず、2000年代に入って性行動が不活発化した要因に関して、学校と高校生の関係のあり方に変化が生じている可能性を示唆している。その変化とは、現代の高校生が権威主義・保守主義を媒介に学校種別のいかに問わず、学校適応を高めていることである。以下では尾嶋・荒牧(2018)にならって学校適応感の高まりを「まじめ」化と操作的にとらえる。「青少年の性行動全国調査」調査では1999～2011年まで学校

² 「草食系男子」について言えば、森岡(2008)の本文では「草食系男子」という用語は一度も使われていない。また本文をよく読む限り、森岡(2008)は現代の男性若年層のもつ男女平等志向や繊細さを記述しているように読める。つまり「草食系男子」という語は、この本の出版元(メディアファクトリー)によって販売戦略としてつけられたものであり、それが独り歩きしただけのことである。この点にも「メディア・フレーム」の奸計を見い出すことができる。

の授業の評価を3段階で聞いているが、図3に示したように、1999年に比べると「楽しくない」は減り、「楽しい」が増える傾向がみられ、高校生の学校適応感が高まったと言える（性差はない）。

なお今回（2017年調査）では「授業」に代えて「学校生活」の評価として4段階で聞いている。評価対象も尺度値も違うので比較は難しいが、図4を見る限り学校適応感はさらに高いレベルにあるように思われる。

では「学校適応」をたかめ、「まじめ」になった高校生は性行動をしなくなったのか。2017年調査の「楽しくない」「どちらかと言えば楽しくない」を合併し、1999年～2005年と同じく学校適応を3段階（「高適応」「中適応」「低適応」）とし、年度別・男女別にキス経験率と性交経験率を集計した。その結果は図5a～図5bに示した。

これらの図からみる限り「まじめ」で学校に適応している高校生ほど性行動が不活発であるとはいえない。むしろ、1999-2005年を中心に学校適応が高いほど性行動経験率が高まっている。ここからみる限り、学校適応を中心とした学校文化へのコミットメントと性行動の活発さといった若者文化へのコミットメントは、背反するものとはいえないだろう。

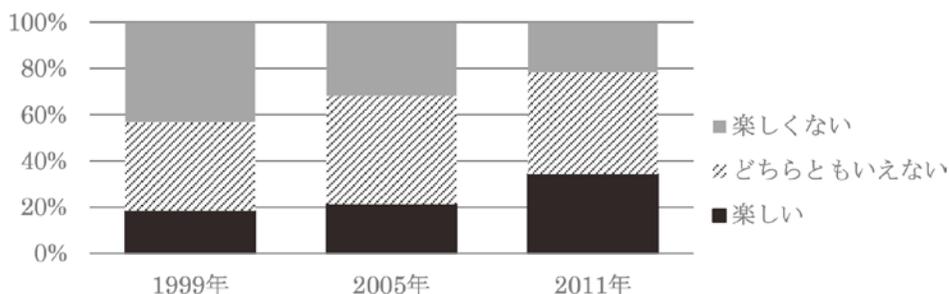


図3 高校生の学校適応の推移

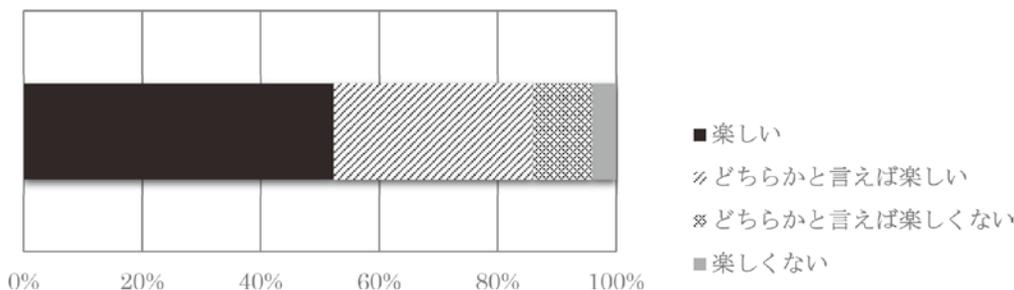


図4 「学校生活」の評価

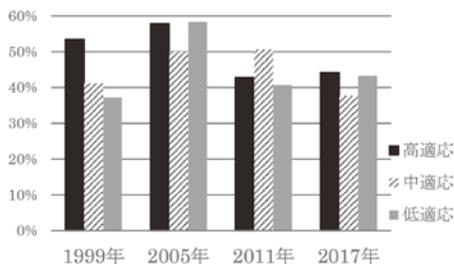


図 5a 学校適応とキス経験 (男子)

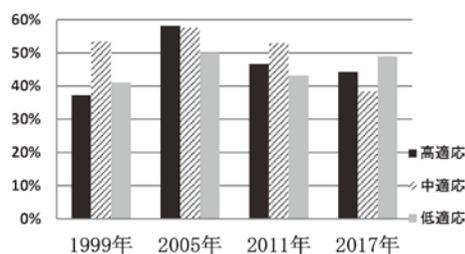


図 5b 学校適応とキス経験 (女子)

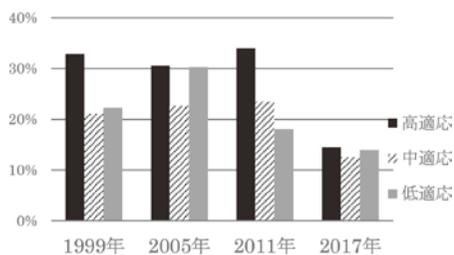


図 5c 学校適応と性交経験 (男子)

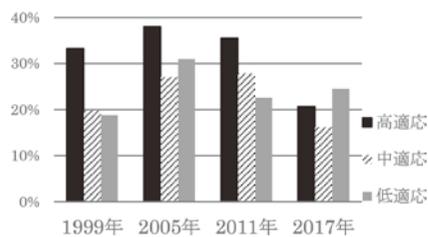


図 5d 学校適応と性交経験 (女子)

2.2 学習時間と性行動

上記の結果は、高校生の学校適応感という意識の面から見た性行動とのかかわりであった。実際の高校生の学習時間という点から見るとまた異なる様相が見えてくる。というのも上記の調査期間に文部科学省は学習指導要領を改訂し、いわゆる「ゆとり教育」から「確かな学力」へと舵を切ったからである。すなわち、1982年の学習指導要領の改訂以来、進められてきた「ゆとり教育」が、いわゆる PISA ショック（2003年と06年に OECD が実施した国際学習到達度テストで日本の生徒の読解力の成績が低迷したこと）などにより、「学力低下」の批判を受け、第一次安倍内閣の教育再生政策のもと「脱ゆとり」の方向に大きく舵を切ったことは知られている。そして「確かな学力」の育成を標榜した学習指導要領が2013年度から高校でも完全実施された。これにより教科学習の時間も増えた。先の予備調査の結果をみても、休日の勉強時間が男女とも「2時間以上」という者が、2010年から2015年にかけて、男子で29%から40%へ、女子では25%から45%へといずれも増加している（片瀬, 2016）。

さらに、2011年の第8回「青少年の性行動全国調査」から、渡辺（2013）は、恋人または恋人以外と性交をする高校生は休日の学習時間が「ない」という者が多く、学習と性行動がトレードオフの関係にあることを明らかにしている。さらに石川（2018）は2017年の高

校生と大学生のデータから、休日にまったく勉強しない者はする者に比べて、性交を経験する確率が高校生男子で2.1倍、高校生女子で2.3倍、また大学生男子で1.2倍、大学生女子で1.3倍高いことを明らかにした。さらに高校生では、大学への進学を志望する高校生ほど、男女とも性行動の経験率が低いことに加え、性交をしなかった理由として「年齢的に早すぎる」を選択する傾向にあることに注目する。ここから石川(2018)は、「十分な学歴を取得し、安定した収入を得るまでは一人前とは言えない、したがってそれまでは経験できないという意識」が現代の若者にあると推測する。というのも、1990年代初頭のバブルの崩壊以降、長期不況による若者の就職難(近年は少子化による人手不足のため若年労働市場は好転しつつあるものの)は、とりわけ女性にとっては望まない妊娠による学業やキャリアの中断や断念の懸念のある性行動を忌避する心理を醸成している可能性はある。

先にもみたように、学校適応という意識の面では高校生の「学校適応感」という意識は、かならずしも青少年の性行動の不活発化との関連は明確ではないが、学習時間や進路選択という行動面では高校生の性行動に抑制的に働いているといえるだろう。

3. コミュニケーション・メディアとしての愛

3.1. 性行動へのコミュニケーション論的アプローチ

このように21世紀における青少年の性行動の変容、とりわけ性的関心の低下を伴った性行動の不活発化に関する説明が錯綜してしまうのは、いずれの説明も青少年の意識(性別役割意識の平等化や学校適応感の増大)や行動(学習時間の増加)といった個人属性による説明にとどまっていることにもよると考えられる。

言うまでもなく性行動は原則として男女間の相互作用である。そこで、相互行為としての性行動という観点も取り入れて、コミュニケーション論の枠組みから性行動の不活発化が生じた背景要因を探っていく必要があるだろう。もちろん今回分析しているデータは個人を対象とした調査データであるから、性行動にコミュニケーション論的に接近するにはおのずと限界はある。しかし、「愛」をコミュニケーション・メディアとしてとらえ、近代社会における親密な関係性の可能性と困難を探ろうとしているルーマンの「愛」に関する理論的検討は、現代の青少年の性愛のあり方を考察するうえでも示唆を与えらると思われる。以下ではまずルーマンの『情熱としての愛』(Luhmann 1982=2005)における「愛」に関する考察をもとに、現代の若者の性行動が不活発化した背景を検討する準備をしていきたい。

3.2. 機能分化社会における相互行為の「ダブル・コンティンジェンシー」

まずルーマンによると、近代社会は、「インパーソナルな関係の拡大とパーソナルな関係の深化」(Luhmann 1982=2005: 11-12)によって特徴づけられる。身分制に代表される「階層化社会」から社会のサブシステムが分出した「機能分化社会」へと移行するにしたがって、経済関係に代表されるインパーソナルな社会関係が拡大する。しかしそれにともなって同時に、近代社会ではパーソナルな関係も深化する。機能分化によって社会が複雑化し、行為選択の可能性が増大することで、自己の行為に対する他者の反応の予測が困難で不確実になるからである。したがって、パーソナルな関係は、インパーソナルな関係のように拡大するのではなく深化する。というのもパーソナルな関係が拡大すると、個人は多様な他者からの過剰な期待にさらされるからである³。

個人が身分や地位に埋め込まれていた「階層化社会」では、伝統的な道徳によって行為が制御されていたので、行為選択における不確実性は少なかった。しかし、機能分化が進んだ近代社会では、自他ともに行為選択の余地が拡大する。ここから社会的世界の「複雑性」も生じる。ここでいう「複雑性」とは、社会がそのとき現実化されているよりも多くの可能性を有していることを意味する。個人が行為選択を行う場である社会は、何も現在あるような社会である必然性はなく、潜在的には多様な別のあり方であった可能性を秘めている。この複雑性は、相互行為における「ダブル・コンティンジェンシー（二重の偶然性）」をうむ。「ダブル・コンティンジェンシー」とは、相互行為において自己の行為に対して相手がどのような接続行為をするかに関する予測が、行為するうえで決定的に重要であるにもかかわらず、相手の接続行為が予測不可能で不確実であると同時に、相手から見ても同様にこちらの行為が予測不能であるような状況を言う。こうしてどちらからみても、相手にどのような行為をするべきかが不確実であり、しかもそのことを両者が考慮に入れている場合に、相互行為はいかにして可能になるかという問題である (Luhmann 1984=1993: 187)⁴。

³ インパーソナルな関係の拡大と相まってパーソナルな関係が深化した背景には、歴史的に見れば、19世紀のロマン主義運動があるという。この運動には産業革命以降、進展する社会の「非人間化」=インパーソナルな関係の拡大に抗して、人間性を回復しようという意図がある。この人間性を象徴するものとして、愛の価値が高められたという。それはアイデンティティも同じである。「アイデンティティ概念は、論理的重要性ではなく、象徴的重要性を有している。アイデンティティ概念によって裏づけられるのは、インパーソナルな関係が優勢な社会では、自分自身を統一体であるとして活動しうる場面を見つけ出すことが困難になっている」(Luhmann 1982=2005: 254-255) こうして19世紀のロマン主義運動によって価値づけられた愛は、この時期、性的関係との結びつきを忌避しながら「恋愛結婚イデオロギー」に結実することになる (三上 2007: 96)。

⁴ この概念はもともとパーソンズら (Parsons and Shils 1951=1960: 3-60) によって提起されたが、ルーマン (Luhmann 1984=1993: 163) は「必然性の排除と不可能性の排除」すなわち必然的でもなければ不可能でないものとして把握しなす。このことは、逆に言えば、偶然性と可能性の間で個人はその行為選択をしているとも言いなすこともできる。したがって、行為選択は常に不確実で予測不可能な状況でなされることになる。つまり、近代人は世界の別様の可能性という観点から、現にあるものをそれと別様の在り方を考慮しながら相互行為をしていることとして把握しなすしている。

この問題はもともとパーソンズら (Parsons and Shils 1951=1960 : 3-60) によって、いわゆる「秩序問題」(ホッブス問題) を解く鍵として提起された。この問題に対して、パーソンズ (Parsons 1937=1978) は、その主意主義的行為理論において、行為を規制する共通の規範的オリエンテーションが社会化の過程を経て内面化されているので、相互行為の秩序が保たれると考えた。この考え方は、その後の社会システム論や構造機能主義にも、基本的には受け継がれる。

3.3. 「選択」と「動機づけ」を接合するメディアとしての愛

これに対して、ルーマンはこれとは異なる観点からこの問題にアプローチする。この「ダブル・コンティンジェンシー」を縮小させるものは、自己の選択と他者の動機づけを接合するメカニズムである。それは、自己が「選択」することによって同時に相手がその選択へと「動機づけ」られるようなメカニズムであり、ルーマンが「コミュニケーション・メディア」と呼ぶものである。ルーマン (Luhmann 1982=2005 : 20) にとって、「愛」もまた「感情」ではなく、「コミュニケーション・メディア」なのである⁵。愛は個人の内部にある「感情」ではなく、コミュニケーションを制御する社会的なコードにはかならない。「愛」は自己の「選択」を他者の「動機づけ」と接合することによって、行為選択の不確実性を縮減し、社会関係を安定させるメディアである。自我がその行為において多くの選択肢から1つを選択した場合、その選択遂行は他者に「伝達」され、他者によって受容される。この「選択遂行」を他者に媒介し、受容させ、その選択に向けて動機づけることで相互作用は始まる。けれども、自己の選択とそれを受容する他者の「動機づけ」の関係は依然として不確実であり、自己の選択は常に他者によって受容されるとは限らない。この不確実性を縮減する動機づけのメカニズムが「愛」である。それは「愛」の名のもとに自我の「選択」を他者に伝達することで、その選択へと他者を「動機づける」ものである。

これによって「人間の個人的な唯一無二の性質、最終的には…個人のどんな性質でも重要になる社会関係」すなわち「親密な関係」(Luhmann 1982=2005 : 12, 傍点原文) の成立が可能となる。というのも、愛が他我にある選択を受容するよう「動機づける」のは、その選択がもう1つの体験メディアである「真理」のように普遍的な妥当性を有するからではなく、

⁵ ルーマン (Luhmann 1982=2005 : 25) は社会システムを存立させる「一般化されたメディア」として、愛のほかに貨幣・権力・真理を想定する。このうち、行為メディアにあたるものが貨幣(他我の行為を自我の体験へと接続させるメディア)と権力(他我の行為を自我の行為へと接続させるメディア)、体験メディアにあたるものが真理(他我の体験を自我の体験へと接続させるメディア)と愛(他我の体験を自我の行為へと接続させるメディア)である。またここでは、行為とは意味選択がそのシステムに帰せられる場合を指し、体験とは意味選択が環境に帰せられる場合を意味している (Luhmann 1984=1993 : 129)。この区別を敷衍するならば「愛する者は行為し、愛される者は体験する」ということになる。

単に自分が愛する人の選択であるというだけの理由によるからである。同じことは自我による他我の選択の受容の動機づけにも当てはまる。というのも、親密な関係においては、自他が常に「愛している者」と「愛されている者」という役割を交代させ、互いに選択を行うと同時に、それに応答したり、受容しあうことになるからである。ここには「愛の再帰性」——すなわち「私自身を愛する者としてまた愛される者として相手から愛され、相手も愛する者としてまた愛される者として私から愛されるということ、つまり自らの感情と相手の感情に呼応すること」(Luhmann 1982=2005: 211)がある。われわれは、愛というメディアの規則に従って、自らの感情を形成・表現すると同時に、他者のうちに特定の感情を想定し、他者とのコミュニケーションの帰結への準備も可能にする(Luhmann 1982=2005: 20-21)。こうして、機能分化によって社会が複雑化し、他者の行為接続が不確実になるほど、「コミュニケーション・メディア」としての愛の重要性も高まることになる。

他方、愛におけるセクシュアリティの問題については、(Luhmann 1982=2005)の「セクシュアリティの取り込み」という章で論じられている。ただし、近代初頭の「情熱としての愛」を愛の「原型」と措定するルーマンにおいては、たとえばギデンス(Giddens 1992 = 1995)のいう「純粋な関係性」にもとづくロマンティック・ラブやコンフルエント・ラブとは異なり、愛もセクシュアリティも抑制的なものとしてとらえられている。「セクシュアリティの取り込み」の章では、セクシュアリティの問題も、「共生システム(Symbiotische System)」という高度に抽象的な問題として論じられている。「共生システム」とは、各メディアの身体的基礎を意味し、たとえば権力ならば物理的暴力の行使、貨幣ならば生理的欲求充足にあたる。愛の場合、これにあたるものがセクシュアリティである。ただし、権力の効果が暴力行使の制限によって成立しているように、愛もまたあからさまな性的関係の抑制を試みることで成り立つ。実際、18世紀以降、セクシュアリティに対する肯定的な態度が現れてきても、いかにしてセクシュアリティを抑制的に扱うかが中心の問題となってきた。とくに19世紀のロマン主義の時代、愛はその精神性によって性的乱れを「軌道修正」し、性的なものの社会的危険性を「骨抜きにする」ことで、結婚と恋愛を「飼いならす」ことに貢献した。こうして性は適度に抑圧されることによって恋愛を促進し、結婚を奨励することになった、という(三上 2007: 97)。

3.4 現代社会における愛のアポリア

こうして機能分化によって特徴づけられる近代社会では、前近代の「階層化社会」のように身分や出自をコードとして社会関係を形成できなくなる。ルーマンの「愛の歴史社会学」でいえば、17世紀の「情熱恋愛」の段階になると、身分制の崩壊によって出自や家制度か

らも解放され、自らの意思をもった「自由な個人」が誕生した。そして、女性も相手の求愛を受容／拒否する自由な意思をもつとみなされようになる。こうして男女とも自らの意思のみにもとづいて愛する相手を選ぶようになる。したがって、「愛する者は自らの欲求による愛の根拠づけ以外のいかなる正当化も必要としない」(Luhmann 1982=2005: 64) ことになる。その結果、それ自身のうちにしか根拠をもたない愛の関係は不確実なものとなり、相手の自由な意図を予測することも困難になり、「ダブル・コンティンジェンシー問題」が生じるのであった。

この問題は、しかし、先にも述べたように、パーソンズ (Parsons 1937=1978) の理論で仮定されているのとは異なり、共通の価値の内面化によっては解決されない。というのも、親密な関係といえどもあらかじめ「愛」があるという事前了解があるという保証もなければ、「愛」をはじめから共有しているという了解もなく、不確実な愛をその都度、試行錯誤的に確認することで存続するものだからである (三上, 2007: 105)。

また「情熱恋愛」の時代に成立した「愛の自己準拠」もまた、現代の「ロマンティック・ラブ」に継承されている。というより、現代の「ロマンティック・ラブ」は愛の自己準拠をさらに純化させている。というのも、現代人は教育の普及によってますます独自の精神世界をもっているため、愛以外の根拠づけを受けつけず、愛においては愛の存在だけが愛の支えとなる。しかも、自他の内的世界を推し量ることはますます困難になるにもかかわらず、お互いにかげがえのない親密な関係になろうとする。しかし、「言葉や行為それ自体は誤解を生みやすいものであるし、事実、親密な関係においても言葉や感情の行き違いはしょっちゅう生ずる。そうすると相手の愛を指針とするしかない。二人の間に愛があるとみなすことだけが、様々な誤解・歪曲・離反から親密な関係＝愛を守っている」(三上, 2007: 106)。ここに現代の愛のアポリアがある。

高度に個人化し独自の精神世界をもつ現代人にとって、互いの意識は相互に区別しあうことで存立している。そうした個人の間では、愛は互いの想像力によって支えられているといってもよい。実際、ルーマン (Luhmann 1982=2005: 66) によれば「愛を高める力量は、理想に代わって想像力に移されている。想像力を駆使して相手の自由を処理して、相手の自由と自らの願望を融合させる」(傍点原文)というメタレベルでのダブル・コンティンジェンシーの処理に行き着かざるを得ない。この点で、愛とコミュニケーションは逆説的な関係になる。すなわち「愛は愛に課せられたコミュニケーション問題もまったく特有の仕方では解決している。逆説的に言えば、愛はコミュニケーションを大幅に断念することによってコミュニケーションを強化している。…(中略)…明示的なコミュニケーションによって、問いかけたり答えたりすることによって、まさに愛は損なわれてしまうことになる」(Luhmann

1982=2005: 28)。こうして今日、愛を維持することはかつてないほど困難な位相に到達し、個人の心理的負荷を増大させていることになる。

4. コミュニケーション負荷による性行動の不活発化

4.1. 親密な関係を維持する心理的負荷

ルーマンの言うように、高次の精神世界をもつ現代人にとって、自他の内的世界を推し量ることはますます困難になるなかで、お互いにかけてえのない親密な関係を維持するとすることは、心理的にも負担は増大させる。まして恋愛という親密な関係では、互いは互いにとって「かけがいのないパーソン」となる。ルーマンの言う愛の「唯一無二性」である。こうして恋愛の相手はかけがいのない「他者」であるがゆえに「親密さはルーティン化されえないのであり、そうした関係においては、たえずそれまで以上相手を考えた行為が求め続けられるのである。自我も他も共に、それぞれの相手に対してみずから創意工夫した行為をおこなうことがたえず求められ、自明視されルーティン化された行為が許されないのが、愛の関係なのである」(小松 1995: 104)。こうして愛の関係を維持するために、つねに「創意工夫した行為」をしつづけることは、現代の気軽なメールやラインによるコミュニケーションの様式に慣れた若者にとって大きな「コスト」になることは想像に難くない。

実際、木村(2016)によると、大都市部の青年においては、1992年から2012年の20年間の間に、異性との交際経験があるという者が増えたという意味で、「恋愛の標準化」(羽瀧 2004)が進む一方で、現在、恋人がいるという者が減少しているという。この「恋愛経験あり・現在恋人なし」の増加は、木村(1014: 166)によれば、「関係相手との関係を維持させることの難しさ、あるいは関係性を持続し得る相手となかなか出会えないという状況」を示しているという。ここには、愛の関係を継続させる心理的負荷あり、「唯一無二性」の関係性を持続させ、維持するために愛する者が直面する煩わしさがある。一言でいえば恋愛は「めんどろ」なものなのである。

4.2 「めんどろ」な性行動

このように、現代社会では恋愛を継続させるコミュニケーションの重要性が増してきた。そこで、「青少年の性行動全国調査」では従来から「性のイメージ」を訪ねてきたが、2017年の調査で初めて「めんどろ-めんどろではない」という項目を入れてみた。この性イメージごとに「告白」から「性交」に至る性愛シーケンスに関する高校生の経験率を男女別にみたものが図6aと図6bである。

「告白」から「性交」に至るいずれの性愛シーケンスの段階においても、性を「めんどろ」と感じる高校生ほど経験率が低い（なお、この傾向は大学生ではさらに顕著になる）。とくに性交経験率は、性を「めんどろ」と考える男子では 5%、女子では 7% であるのに対して、「めんどろでない」と回答した男子では 25%、女子では 37% にのぼる。このことからすると、現代の若者にとっては、性愛を伴う男女関係は、ルーマンの言うメディアとしての「愛」に伴う過剰なコミュニケーション負荷をもたらすものであり、LINE のような手軽なコミュニケーション・ツールに慣れ親しんだ若者には忌避されるようになった可能性が高い。

そこで、デート、キス、性交という主要な性行動を従属変数として二項ロジスティック回帰による分析を試みた。独立変数としては、基本属性として性別（男子ダミー）、学年を統制したうえで、これまで性行動を活発化させると考えられてきた街遊び頻度（1月に街遊びに行く回数）、アルバイト（「している」を 1、「していない」を 0 としたダミー変数）、および先に検討した学校適応や「まじめ志向」にかかわる学校適応感と休日学習時間に加えて、コミュニケーション負荷（性を「めんどろ」と思う意識）を投入した（表 1）。

その結果、ほとんどの変数が有意な効果をもったが、偏回帰係数の絶対値からみて、コミュニケーション負荷は、アルバイト経験に次いで大きな規定力をもっていた。このうちアルバイトは、どの性行動に関しても、これらを活発化させる方向で作用している。高校生のアルバイトは、自分で自由に使える資金を得るだけでなく、成人も含めた交際範囲を広げることで青少年の性行動を活発化させるものと位置づけられてきた（片瀬 2007: 40）。これに対して、コミュニケーション負荷はいずれも有意な負の係数を示し、性行動を不活発化させる要因となっていた。また、コミュニケーション負荷と性別ダミーとの交互作用を入れても、回帰係数は有意な値を示さなかった（結果は省略）ことから、男女の双方においてコミュニケーション負荷は等しく性行動を抑制する要因となっているとみることができる。

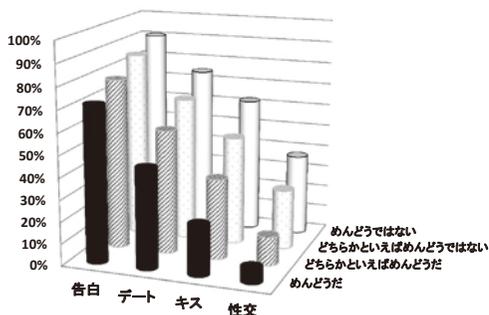


図 6a コミュニケーション負荷と性行動（男子）

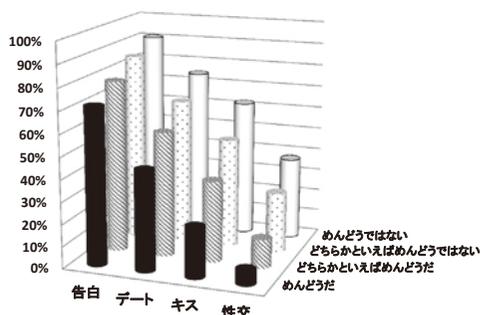


図 6b コミュニケーション負荷と性行動（女子）

表 1. 高校生の性行動の規定因

独立変数	デート		キス		性交	
	B	標準誤差	B	標準誤差	B	標準誤差
男子ダミー	-0.068	0.069	-0.186	0.071**	-0.165	0.094
学年	0.171	0.047***	0.262	0.048***	0.648	0.063***
街遊び頻度	0.121	0.011***	0.073	0.008***	0.070	0.007***
アルバイト有無ダミー	0.566	0.081***	0.903	0.079***	0.986	0.100***
学校適応感	0.281	0.058***	0.140	0.061*	-0.062	0.078
休日学習時間	-0.042	0.035	-0.034	0.038	-0.082	0.053
コミュニケーション負荷	-0.067	0.019***	-0.094	0.019***	-0.119	0.022***
定数	-1.004	0.182***	-1.637	0.190***	-3.121	0.248***
-2 対数尤度	5170.874		4905.384		3241.687	
Cox-Snell R ²	0.095		0.113		0.114	
Nagelkerke R ²	0.127		0.155		0.192	

注) ***: $p < 0.001$ *; $p < 0.05$

むすび

冒頭に引いたギデンズ (Giddns 1992 = 1995) の理論に依拠しながら、谷本 (2008) は、1990 年代と 2000 年代の若者雑誌の恋愛に関する記事の内容分析をおこなった結果、恋愛をロマンティック・ラブから結婚に至るシークエンスとする記事が減少し、結婚という結果よりも恋愛のプロセスを重視し、不確定で曖昧な揺れ——ルーマン流に言えば「ダブル・コンティンジェンシー」状況——を楽しむ現代的恋愛を扱う記事が増えてきたという。こうした傾向を、谷本 (2008) は、ギデンズらのいう「再帰的近代」の議論を参照しながら説明する。それによると、近代社会では「脱埋め込み化」——人々のアイデンティティも生まれ育った環境から切り離され、個人はかつては手に入れることのできなかった職業やライフスタイルなどの多様な選択肢を得るようになったことが実現すると同時に、「再帰性」——すなわち制度や組織の自明性が失われ、それがたえず問い直されることになってきた。というのも、近代以前の伝統的社会においては、伝統や慣習が行為や制度の正当性を保障できたが、近代社会においては個人の行為も社会の制度も最新の情報なり知識に照らして、その正当性が問われることになる。

こうした脱埋め込み化や再帰性の高まりは、すべてのことを個人のリスク計算にもとづく選択の問題として引き受けさせるため、個人には大きな「不安」が生まれる。こうしてすべてを個人の選択に委ねることは、当然、恋愛といった人間関係にも及ぶ。伝統的社会では結婚の相手も外部社会——家柄を考慮した親の意向による見合い結婚などに委ねられていたが、近代社会では当事者間の「純粋な関係性」の選択と構築に委ねられるようになった。ところが、谷本によれば、山田 (2007) も指摘するように、1990 年代前半のバブル崩壊の結果、

若者の雇用の流動化—無業者や非正規雇用の増大などによって、若者の収入格差が拡大し、生活に対する「不安」はさらに増大し、その結果、リスク計算がますます難しくなって、結婚も先送りされ、晩婚化・非婚化が生じたという。これによって、結婚など結末を先送りする傾向が生まれた。また選択の幅の拡大に伴う不安の増大によって、人間関係の曖昧さを享受する傾向や、曖昧なアプローチ方法や演出を歓迎する傾向も説明される。というのも、現代の恋愛言説には、「関係を構築する不安感と、同時に関係破綻を回避するリスク計算が読み取れる」（谷本，2008：217）からである。

谷本（2008）のいう関係を構築する不安感と破綻を回避するリスク計算は、ルーマンの言い方を借りると「親密な関係の自律化」がもたらすものである。すなわち「親密な関係にとっての外的な支柱は取り払われ、親密な関係の内的緊張がたかまることになる。親密な関係の安定化は、今や純粹に個人的な要因によってのみ可能にされねばならず、しかもそれは相手と深くかかわりあうことによってのみ可能にされている」（Luhmann 1982=2005：241）。21世紀における性行動の不活発化の背景には、こうした恋愛リスクの個人化という問題があるのかもしれない⁶。

【付記】

例によって難澁なルーマン理論を読みこなすにあたって苦勞をし、佐久間政広・本学教授に草稿に目を通していただいた。ルーマン理解においてそれほど大きな隔たりはなかったかと思うが、いくつか見落として点をご指摘いただいた。ここに感謝する。もちろん本稿のルーマン解釈に瑕疵があるとしたら責任は筆者にある。また本稿はルーマン論ではないが、それにしても行為と体験の区別、共生システムとしてのセクシュアリティ、友愛から愛への進化、愛のゼマンティックの進化など、主としてルーマンの「愛の歴史社会学」にかかわる重要で興味深い論点にはほとんど触れることはできなかった。ルーマンは西欧中世後期の「宮廷愛」「情熱愛」から近代の「ロマン主義愛」へという「愛のゼマンテック」の進化を論じたうえで、現代社会における「愛」の困難を論じている。こうした「愛の歴史社会学」を踏まえなければ、現代の「愛」が直面する問題も正確に位置づけることはできない。これらの課題については他日を期したい。

引用文献

- 土場学，1993，「愛というメディア—社会変動のゼマンティック」『社会学評論』44(3)：314-330。
深澤真紀，2007，『平成男子図鑑』日経 BP 社。

⁶ 性愛をめぐる男女のリスクの非対称性については、片瀬（2017）参照。

- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity Press (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房).
- Gitlin, Todd, 1997, *The Sixties: Years of Hope and Days of rage Range*. (= 1993, 正田三良・向井俊二訳『60年代アメリカ—希望と怒りの日々』彩流社).
- 羽瀨一代, 2008, 「青年の恋愛アノミー」岩田考・羽瀨一代・菊池裕生・苜米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル』恒星社厚生閣: 77-90.
- 林雄亮, 2018, 「青少年の性はどう変わってきたか—性行動・性意識の消極化と分極化」日本性教育協会編『青少年の性行動の不活発化と多様性—「第8回青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像』9-19.
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智『ニートって言うな!』光文社.
- 石川由香里, 2018, 「性行動と性規範・ジェンダー規範との関連性を探る」日本性教育協会編『青少年の性行動の不活発化と多様性—「第8回青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像』: 20-29.
- 片瀬一男, 2007, 「青少年の生活環境と性行動の変容」日本性教育協会編『「若者の性」白書—第6回青少年の性行動全国調査』小学館: 24-48.
- , 2015, 『若者の戦後史』ミネルヴァ書房.
- , 2017, 「「リスク」としての性行動・「危険」としての性行動—避妊をめぐる男女の非対称性—」『東北学院大学教養学部論集』, 174: 7-42.
- , 2018, 「第8回青少年の性行動全国調査」の概要」日本性教育協会編『青少年の性行動の不活発化と多様性—「第8回青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像』: 2-8.
- 木村絵里子, 2016, 「「情熱」から「関係性」を重視する恋愛へ」藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代『現代若者の幸福—不安感社会を生きる』恒星社厚生閣: 137-168.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2017, 『第15回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査・独身者調査の結果概要』
(http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp)
- 小松丈見, 1995, 「ダブル・コンティンジェンシーの論理」『社会学研究』63: 91-107.
- Luhmann, Niklas, 1982, *Libe als Passion: Zur Condierung von Intimat*. Shurkamp (=2005, 村中知子・佐藤勉訳『情熱としての愛—親密さのコード化』木鐸社)
- , 1984, *Sozial System: Grundriß: Einer Allgemeinen Theorie*. Suhrkamp. (=1993, 佐藤勉監訳『社会システム理論(上)』恒星社厚生閣)
- 三上剛史, 2007, 「「切り」つつ「結ぶ」メディアとしての<愛>—Liebe als Passion (N. Luhmann) 解釈のためのノート」『国際文化学研究 神戸大学国際文化学部紀要』29: 93-116.
- 村中知子, 1994, 「愛のシステムの論理と可能性」佐藤康邦・中岡成文・中野敏男編『システムと共同性—新しい倫理の問題圏』昭和堂: 226-244.
- 森岡正博, 2008, 『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー.
- 尾嶋史章, 2018, 「まえがき」尾嶋史章・荒牧草平編『高校生たちのゆくえ—学校パネル調査からみた進路と生活の30年』世界思想社: vii-xi.
- ・荒牧草平, 2018, 「進路希望と生活・社会意識の変容: 30年の軌跡」尾嶋史章・荒牧草平編『高校生たちのゆくえ—学校パネル調査からみた進路と生活の30年』世界思想社: 18-14.
- 小此木啓吾, 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社.
- Parsons, Talcott, 1937, *The Structures of Social Actions: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. (=1976-89 稲上毅, 厚東洋輔・溝部明男, 『社会的行為の構造』木鐸社).
- , 1949, *The Social System*, The Free Press (=1951, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店).
- and Edward Shils 1951. *Toward a General Theory of Action* (=1960, 永井道雄・作田啓一・

- 橋本真共訳『行為の総合理論目指して』日本評論社.
- 高橋征仁, 2007, 「コミュニケーション・メディアと性行動における青少年総の分極化—携帯メールによる親密性の変容」日本性教育協会編『「若者の性」白書—第6回青少年の性行動全国調査』小学館: 49-80.
- , 2010, 「社会統計でみる<草食系男子>の虚実—欲望の時代からリスクの時代へ」『現代性教育月報』, 28(1): 1-7.
- , 2013, 「欲望の時代からリスクの時代へ」日本性教育協会編『「若者の性」白書—第7回青少年の性行動全国調査』小学館: 43-61.
- 谷本奈穂, 2008, 『恋愛の社会学—「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
- 轟 亮, 2001, 「職業観と学校生活感—若者の『まじめ』は崩壊したか」尾嶋史章編『現代高校生を計量社会学』ミネルヴァ書房: 129-158.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学—アイコンか・晩婚化は続くのか』丸善.
- , 2007, 『少子化社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』岩波書店.